【調査：児玉九十】

児玉九十生ゆかりの地の調査①―静岡県三島市・島田市・掛川市

長谷川　倫　子※

1. はじめに

明星教育センターでは、自校史研究の一環として、明星学苑・明星大学創者の児玉九十（1888-1889）の事績に関する調査を行っている。今回、下記の日程で、児玉九十が生誕～中学校時代を過ごした静岡県三島市・島田市・掛川市を巡る調査を行った。

日時：2013 年 3 月 6 日（水）
行程：東京
↓
三島市
・児玉九十生誕地　三島市青木（三島二日町駅）
・三島市立中郷小学校（旧：中郷尋常高等小学校）（大場駅）
↓
掛川市
・掛川市立掛川西高等学校（旧：掛川中学校）
↓
島田市
・養家の洞善院
・転校先の小学校　金谷小学校（旧：金谷小学校尋常科・高等科）

児玉九十が静岡で過ごした時期は、誕生から掛川中学校卒業までの約 20 年間であるが、その年代等は、『児玉九十自伝』略年譜 [*1] によれば、以下の通りである。

明治 21 年　11 月 15 日、静岡県田方郡中郷村（現三島市）に、父増島良吉、母志かの次男として誕生。その日が子どもの祝日、七五三であったため、生来の子供好きの原因も誕生日と関係があるようにいわれた。兄、姉二人、妹、弟二人の七人兄弟であった。
明治 28 年　4 月、中郷尋常高等小学校に入学。
明治 31 年　3 月、静岡県金谷町洞善院に移籍、児玉祖虔の養子となる。祖母荒見いしの道徳的薫陶をうけた。4 月、金谷小学校尋常科四年に転入。
明治 37 年　3 月、金谷小学校高等科を卒業。4 月、静岡県立掛川中学校二年に入学。
明治 41 年　3 月、静岡県立掛川中学校を卒業。9 月、第四高等学校大学予科第一部文科（英文）に入学。

※ 学芸員　明星教育センター

本稿では、上記年譜と『児玉九十自伝』の記述を基に、各地の歴史を織り交ぜながら、実地調査の報告を行った。なお、調査当日は移動の関係上、児玉九十の生立ち時系列の行程となっていない。本稿では、便宜上、生誕（三島市青木）～幼少時代（三島市金谷）～中学校時代（掛川市）の時系列の順で、報告を行う。

2. 田方郡中郷村青木（現：三島市青木）～児玉九十生誕から 10 歳まで～

①生誕地　中郷村青木

児玉九十は、略年譜にあるように、明治 21 年に父 増島良吉、母 志かの次男として誕生し、明治 31 年に、金谷町（現島田市金谷）の洞善院へ移籍するまで、田方郡中郷村青木で生まれ育った。生誕地である三島市青木の地名については、『角川地名大辞典　22　静岡県』[*2] には、以下のように記されている。

［中世］　**青木村**　室町期から見える村名。伊豆国田方郡のうち。（中略）戦国期には小田原北条氏の「役帳」に小田原衆渡辺弥八郎の役高として「廿壱貫五百文 青木・平田ニ伏」とあるほか、御馬回衆左近士九郎左衛門の役高として「四拾壱貫文　豆州　青木内在庁免」、寺領大珠寺分として「一貫文　青木ニ伏」とある。

［近世］　**青木村**　江戸期～明治 22 年の村名。君沢郡のうち。（中略）

［近代］　**青木**　明治 22 年～現在の大字。はじめ中郷村、昭和 29 年からは三島市の大字（中略）昭和 43 年一部が藤代町となる。

上記によると、「青木」という地名は、室町期より見られ、明治 22 年～昭和 29 年は「中郷村青木」、それ以後、現在に至るまでは三島市の大字として地名が受け継がれている。

青木周辺の最寄りの駅は、三島二日町駅であるが、その地名を表すものとして、駅の構内に「青木新踏切」と称される踏切があり、「青木」の地名を確認することができる。

青木周辺の最寄りである三島二日町駅

「青木」の地名が示されている「青木新踏切」

さらに、当時の青木の風土について、『日本歴史地名大系第二二巻　静岡県の地名』[*3] には、

三島町内の湧水を源流とする御殿川の流れによって開けた地で、同川の西岸に位置する。同川流域は古代からの水田耕作地帯で、三島の経済基盤となった場所と考えられている。

とあり、古来より御殿川の水源を基に、豊かな農村が広がっていた様子が窺える。

このような風土については、『児玉九十自伝』にも以下のように回想されている。

> 一望の水田におおわれた温暖な風土は、未熟児としての私の発育にとって非常な恵みであったと感謝しています。もし寒冷の地であったならば私は育たなかったかもしれない、という気持は、ふるさとを思うたびにつきまとって離れないのです。（18 頁）

上記のように記憶されているように、当時の中郷村青木一帯が純農村地帯であったことが窺える。今回調査に訪れた際の青木周辺の様子は、住宅地が広がり、わずかに残る田んぼなどが当時の面影を残すのみである。

青木から国道 136 号線沿いを歩いていき、三島市立中郷小学校を訪れた。中郷小学校の前身は、児玉九十が通学した旧村立中郷尋常高等小学校である。児玉九十は、1895（明治 28）年（7 歳）に入学し、養家へ移籍する尋常科 3 年生（10 歳）まで通学した。当時の小学校の様子は、『児玉九十自伝』によると、

> いよいよ小学校に上がる日が来たというよろこびと、未知の世界に対する期待が私をうきうきさせていたにちがいありません。田んぼの向こうに、村立中郷尋常高等小学校の校庭が見えてくると、私は思わず母の手を強く握りしめ、まっ盛りの桜の下の校門をくぐったのです。ときに明治二十八年、そのらんまんの日からにわかに、私のまえに新しい世界がうなりをあげて回りはじめたのです。（22 頁）

現在の三島市立中郷小学校正門

と記されている。現在の中郷小学校は、梅名・安久・八反畑・鶴食・中島の一部を学区としている。国道 136 号の開通に伴い、当校周辺の風景も田園地帯から都市化が進んでいるようで、住宅・会社・工場などが立ち並んでいる。

3. 金谷町（現：島田市金谷）～養家洞善院と金谷小学校～

児玉九十は、1898（明治 31）年に金谷町（現：島田市金谷）の曹洞宗金龍山洞善院住職の児玉祖虔の養子となり、養祖母荒見いしによって育てられることとなった。生家のある中郷村青木を離れ、当寺の養子となったいきさつに関しては、『児玉九十自伝』において、以下のように記されている。

> 私の勉強する姿を見て、ひそかに何かを考えていたと思われるのです。次男坊でもあり、人一倍虚弱で体格の小さい私を、肉体労働に向かない、なんとかしなければ、と考えるのは当然です。子の日常の片言隻句や生活態度にそそぐ親たちの眼には鋭いものがあります。（中略）ちょうどそんな矢先に、祖母の縁つづきの僧籍にある人と、長姉との縁談がもち上がったのです。（中略）姉は、金谷の在の五和村にある長泉寺に嫁ぐことになりました。（中略）にわかに私の身の振り方が、縁談と抱き合わせのかたちですすめられていたようです。（30 ～ 31 頁）

上記のように、長姉とみの縁談先の長泉寺*とゆかりのある洞善院へ養子に入ることとなり、金谷へと移った。移

籍先である洞善院での生活は、掛川中学校に進学するまで続く。

養家に移ったと同時に、中郷尋常小学校より、金谷小学校尋常科４年に転入し、さらに高等科に進学、1904（明治37）年に卒業した。当校では、多くの恩師と出会い、特に思い入れの深い学び舎であったようで、『児玉九十自伝』内でも「私は母校・金谷小学校に限りない愛着を覚えます」と綴られている。その表れのひとつとして、金谷小学校には、金谷小学校創立百年（1973（昭和48）年）にあたり建立された「百年記念の碑」に、以下のような児玉九十筆の碑文が現在も残されている。

金谷小学校創立百年記念

はばたけ

金谷っ子

たくましく

明治三十七年三月卒業
明星大学学長　　児玉九十

児玉九十筆による金谷小学校創立百年記念碑

この碑文は、小学校のシンボルツリーであるクスノキの下に建立されており、その横に埋められているタイムカプセルの蓋には、

ここに学ぶ金谷っ子が朝に夕にこの碑文に接し幼な心に強くやきつけ生涯忘れ得ないことばとして国内は勿論世界にたくましくはばたいてほしいとのねがいをこめてのことばである。

という碑文に込められた願いが児玉九十の言葉によって記されている。

また、創立百年時に児玉九十より、寄贈された書籍は、「児玉文庫」と命名され、収蔵されている。これらは、金谷小学校と児玉九十との深い関わりを示すものとして、現在も受け継がれている。

記念碑は、クスノキの下に建立されている。

碑文の由来を示すタイムカプセルの蓋

4. 掛川中学校

児玉九十が旧制掛川中学校（掛川西高等学校）は、1850（明治 13）年に設置され、1948 年に学制改革により静岡県立掛川第一高等学校となった。1949 年静岡県立掛川西高等学校と改称され、現在は男女共学となっている。

1904（明治 37）年に金谷小学校高等科を卒業した児玉九十は、同年 4 月に静岡県立掛川中学校 2 年に入学し、1908（明治 41）年に卒業した。当時、金谷から掛川への通学は、列車の時間に無理があったので、寄宿舎に入ることとなり、金谷を離れた。

掛川中学校は、城下町として知られる掛川の中心部にあり、正門からは、掛川城が見られる。また、今回は予定の関係上、立寄ることができなかったが、近辺には大日本報徳社[*4]があり、児玉九十の教育理念の中心である「実践躬行」の精神は、この中学校時代で培われていったといえる。

静岡県立掛川西高等学校正門

5. おわりに

今回の調査では、児玉九十の生誕から青春期前半を過ごした静岡を軸に現地調査を行った。明星大学の創立者である児玉九十の生涯とその人となりを知ることは、本学の教育の理念を理解するにあたって、大きな手掛かりになると思われる。また、『児玉九十自伝』に記載されていることに関して、実際に足を運び現地を辿った点は、実に有意義な調査となった。現地調査を行うことにより得られた事実を今後も自校研究へといかしていきたい。

付記　本調査にあたって、静岡福祉大学長坂和則氏・各所関係者の方々に多大なる尽力を賜りました。末筆ながら、深く感謝の意を表します。

注記

*1 「児玉九十略年譜」（児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』、明星大学出版部、517 頁）

*2 『角川地名大辞典　22　静岡県』（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三編、角川書店、1982 年、49 頁）

*3 『日本歴史地名大系第 22 巻　静岡県の地名』（有限会社 平凡社地方資料センター編、平凡社、2000 年、122 頁）

*4 大日本報徳社　公益社団法人大日本報徳社。二宮尊徳（1787-1856）の報徳思想の普及活動を行っている団体で、1898（明治 31）年に、二宮尊徳の指導を受けた岡田佐平治が掛川市倉真出身だったことから掛川市で設立される。報徳思想を形成する三つの柱として、「勤労」、「分度」、「推譲」を展開している。「勤労」は、積小為大という言葉に代表される考えで、大きな目標に向かって行動を起こすとしても、小さなことから怠らず、つつましくつとめなければならないということ。「分度」とは、適量・適度であることで、現状の自分にとってどう生き、どう行うべきかを、知るということが大切であるという考え。「推譲」とは、肉親・知己・郷土・国のため、あらゆる方面において、譲る心を持つべきであるという考え。

参考文献

児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』（明星大学出版部、1990 年）

「角川日本地名大辞典」編纂委員会 竹内理三編『角川地名大辞典　22　静岡県』（角川書店、1982 年）

有限会社 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系第 22 巻　静岡県の地名』（有限会社 平凡社地方資料センター編、平凡社、2000 年）

参考資料

三島市立中郷小学校ホームページ　http://www.city-mishima.ed.jp/nakazato-e/　（2013 年 2 月 26 閲覧）

大日本報徳社ホームページ　http://www4.tokai.or.jp/dainihonhoutoku/　（2013 年 3 月 8 日閲覧）